

■シンポジウム

「健康運動指導士との連携の意義・可能性と課題」

中越地震・中越沖地震における地域との連携

～地震災害時におけるコミュニティのあり方を考える～

新潟大学人文社会教育科学系
准教授 村山敏夫

シンポジウムの際にキーワードとなる項目を列挙する。本稿で挙げた要点を、シンポジウムの中で更に皆様と共に考えることができればと思う。

1、被災後、健康運動指導士がとった行動は

2004年10月23日、日も暮れてあたりはすっかり薄暗くなったその時、地震は突如として我々を襲った。新潟県小千谷市を震源地とする最大震度7の中越地震によって、我々は被災者となった。連絡手段も断たれ、今何が起きているのか、被害がどの程度のものであったかを知るすべもなく、時間だけが過ぎていく。健康運動指導士も様々な状況の中でそれぞれの対応を迫られていた。中越地震、中越沖地震では、特にエコノミークラス症候群が早い段階で指摘されていた。健康運動指導士のそれぞれの活動をシンポジウムで紹介する。

2、コミュニティの重要性

コミュニティが生まれる要因にはあらゆる場面において想定される。地震発生後の被災者には、いつまた襲ってくるかも分からぬ余震から自身を守るために、あるいはその恐怖や孤独を振り払うために一人でも多くの人々と時間を共に過ごしたいのかもしれない。職場のとりあえずの復旧作業を終えて自宅に戻ると、既に仮設テントが設置され炊き出しが行われていた。情報が遮断された状況で、コミュニティの存在は心の支えになる。



図1、被災時直後の町内独自の炊き出しの様子

3、健康運動指導士の課題と可能性

中越地震の経験を活かし、新潟県では県から健康運動指導士にエコノミークラス症候群予防のためのボランティア養成があった。保健師と健康運動指導士が共に被災地に回って状況を把握しては、場合によってはその場で一緒に運動を行った。特に高齢の被災者は、人と話がしたい。保健師と健康運動指導士との連携による活動は、被災者の心の不安を少しでも埋めることができたのではないかと。健康運動指導士だけではその意義が薄いかもしれない。しかし、他の職種と連携することで、その価値は何倍にも活かされる。

表 1、中越地震の概要

発震：2004年10月23日 土曜日
午後5時56分
震源：新潟県小千谷市内、北緯37.3度、東経138.8度の地点
震源の深さ：13km
地震の規模：マグニチュード6.8
最大震度：北魚沼郡川口町：震度7
地震の種類：直下型地震
余震回数：18回(震度5弱以上)
1,000回以上(震度1以上)
死傷者：死者68人(2007年8月23日時点)
負傷者4,805人

表 2、中越沖地震の概要

発震：2007年7月16日 月曜日
10時13分
震源：新潟県上中越沖（新潟市の南西約60km）
震源の深さ：約17km
地震の規模：マグニチュード6.8
最大震度：新潟県長岡市（小国町）、柏崎市（西山町）、刈羽村：震度6強
地震の種類：直下型地震
余震回数：107回（7月19日20:00現在）
死傷者：死者14名 負傷者1987名



保健師による問診



運動指導士の情報共有ミーティング